モーツァルトのピアノ三重奏曲について

石　原　充　子

Mozart's Piano Trio

Mitsuko ISHIHARA

緒　　言

近年，増々，室内楽が注目されている．私も1年程前から，アンサンブルに参加する機会が多くなった．私達ピアニストにとって室内楽を演奏することは，独奏曲・協奏曲と並び，非常に勉強になる．独奏の場合とは違う技術や音楽性が求められ，それをお互いに高めあいながら1つの音楽を作り上げていくという，貴重な経験をする．

今回は，ヴオルフガング・アマデウス・モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart 1756-1791) のピアノ三重奏曲を概観し，特に演奏体験のある K. 564 について楽曲研究を行なうことにした．

ピアノを伴う室内楽

室内楽とは，教会で歌うための〈da cantare in chiesa〉作品から，室内で歌うための〈da cantare in camera〉作品を区別したものである．現在，室内楽は，室内で演奏されるものとは限られていないが，室内楽という概念から声楽を除くようになったのは，18 世紀に入ってからである．当時，プロイセンのフリードリヒ大王やロシアのエカテリナ女帝らの啓蒙君主のもとで，芸術や文化はめざましい発展をとげた．特に音楽は，最も華やかな存在であり，又宮廷や家庭で楽しむことができる身近な存在でもあった．このような中で，宮廷や家庭で容易に演奏できる二重奏，三重奏などの室内楽が生まれた．音楽様式にも変化がみられ，教会音楽・オペラ・歌曲・器楽は，いわゆるバロック様式 (対位法技法や通奏低音様式) から古典派様式 (和声的な伴奏の上に主旋律が奏されるホモフォニー) へ移行した．又，18 世紀半ば頃のピアノフォルテの出現は，鍵盤楽器を使用する作品の著しい発展を助長した．ヨハン・ショーベルト (Johan Schobert 1735 頃-1767) はピアノを伴う室内楽を作った．それらの作品や「伴奏される」鍵盤楽器ソナタが，のちのピアノ二重奏・ピアノ三重奏・ピアノ四重奏などの基になったといえる．つづく同時代の作曲家として，フランツ・ヨゼフ・ハイドン (Franz Joseph Hydon 1732-1809)・モーツァルトが室内楽の作品を残している．ハイドンは，ソナタ形式をもつ室内楽を確立し，35 曲のピアノ三重奏曲を残した．しかし，ほとんどの作品は，ヴァイオリンとチェロがピアノを支える形になっているにすぎない．モーツァルトは，ピアノ・ヴァイオリン・チェロの3つの楽器を対等のものにし，のちのルードヴィヒ・ヴァン・ベートーベン (Ludwig van Beethoven 1770-1827) やフランツ・ペーター・シューベルト (Franz Peter Schubert 1797-1828) などのすぐれた作品の先駆となった．

モーツァルトのピアノ三重奏曲

モーツァルトのピアノを伴った室内楽作品は，ピアノとヴァイオリンの二重奏ソナタ41曲，三重奏曲7曲，四重奏曲2曲，五重奏曲1曲というように比較的数は少ない．しかし弦楽器，管楽器のみによって構成される室内楽に対して，ピアノを加えることによって内容的にも技術的にも華やかな面を示すものになった．

モーツァルト〈新全集〉によるとピアノ三重奏曲は，K. 254，K. 496，K. 498，K. 502，K. 542，K. 548，K. 564の7つの作品がある．まだ他にも，三重奏の形式をとっているものとしては，ピアノとヴァイオリンのための二重奏曲K. 10～K. 15そしてK. 442を挙げることができる．K. 10～K. 15は，ピアノ・ヴァイオリン(あるいはフルート)と任意な形ではあるが〈ad libitum〉チェロを伴うことができる．この一連の作品はモーツァルトがロンドンで，シャルロッテ女王に献呈するため1764年に作曲されたが，この楽譜には2種類のものがある．そのひとつの楽譜には，チェロのパート譜が書かれ，明らかにピアノ三重奏の形をとっている．1783年頃作曲されたK. 442は，3つの楽章(第1楽章　Allegro二短調・第2楽章　Andantino　ト長調・第3楽章　Allegro　二長調)からなっているが，3楽章とも断片しか残っていなかった．その未完であったものを，マクシミリアーン・シュタートラー(Maximillian Stadler 1748-1833)が補筆し，1797年〈遺作作品56〉として出版した．

ピアノ・ヴァイオリン・チェロの編成による三重奏曲は，ザルツブルグ時代(1772～1779)に作曲されたK. 254“Divertimento”と，ヴィーン時代(1781～1791)に作曲されたK. 496, K. 502, K. 542，K. 548，K. 564そしてピアノ・クラリネット・ヴィオラの編成によるK. 498が挙げられる．

モーツァルトが最初に作曲したK. 254　変ロ長調のピアノ三重奏嬉遊曲は，ザルツブルグ時代中期(1776年)のものである．この曲の草稿の上書きには“Divertimento à 3”(3声のディベルティメント)と書かれてあるが，チェロのパートが明確に書かれ，ピアノ三重奏の古典的形式への変化が表われている．

この他に，1786年から1788年にかけてすぐれた三重奏曲が作曲された．その三重奏曲には，K. 496ト長調，ピアノ・クラリネット・ヴィオラのためのK. 498「九柱戯場三重奏曲」変ホ長調，K. 502変ロ長調，K. 542ホ長調，K. 548ハ長調，K. 564ト長調がある．これら6曲の作品は，モーツァルトが大司教との確執からザルツブルグを離れ，ヴィーンに定住するようになってからのものである．モーツァルトにとってヴィーンは音楽活動の最適の場所であり，特にクラヴィーアのめざましい発展もあり，ピアノを使っての教授，彼自身による演奏，協奏曲，室内楽等の作曲が多くなされた．ヴァイオリンとチェロが単に伴奏の役目をわりあてられている初期の作品に比べ，後期の5つの作品は，3つの楽器がようやく平等な役割を果たす形での演奏が定着した．

K. 564について

この作品はモーツァルト最後のピアノ三重奏曲である．1788年10月27日にヴィーンで作曲された．ピアノパートの草稿が残っていたことから，原曲はピアノソナタと考えられていた時期もあった．しかしモーツァルトの作品目録にも“Ein Terzet Klavier, Violin und Violoncello”と記入されているので〈新全集〉では三重奏曲に組み入れられている．

今回，K. 564を取り上げたのは，ピアノと弦の協奏が巧みに行なわれ，ギャラントスタイル

のモーツァルトの手法があらゆる箇所に表われており，しかも親しみやすい曲だからである．各楽章の分析と演奏する時，特に留意した点を述べる．

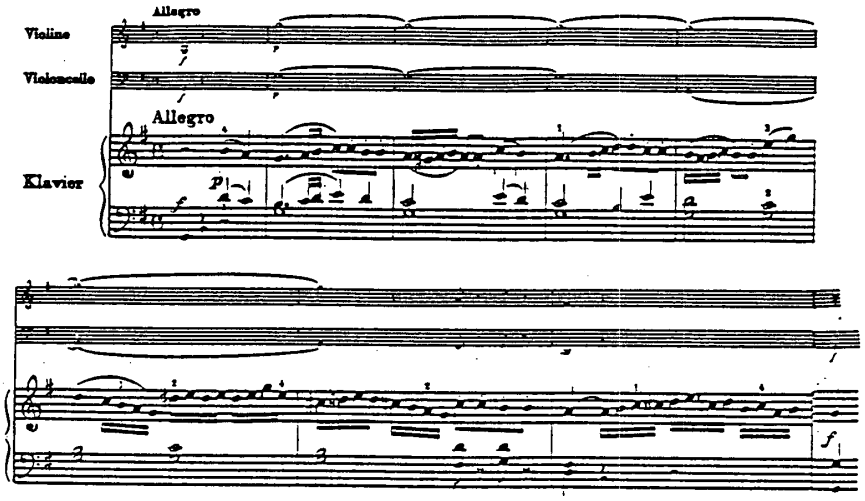
第1楽章　Allegro　ト長調　4分の4拍子　ソナタ形式(117小節)

躍動感あふれる楽章である．

提示部　ピアノが8小節の主題を提示(譜例1)．♩♩♩.→問いの部分

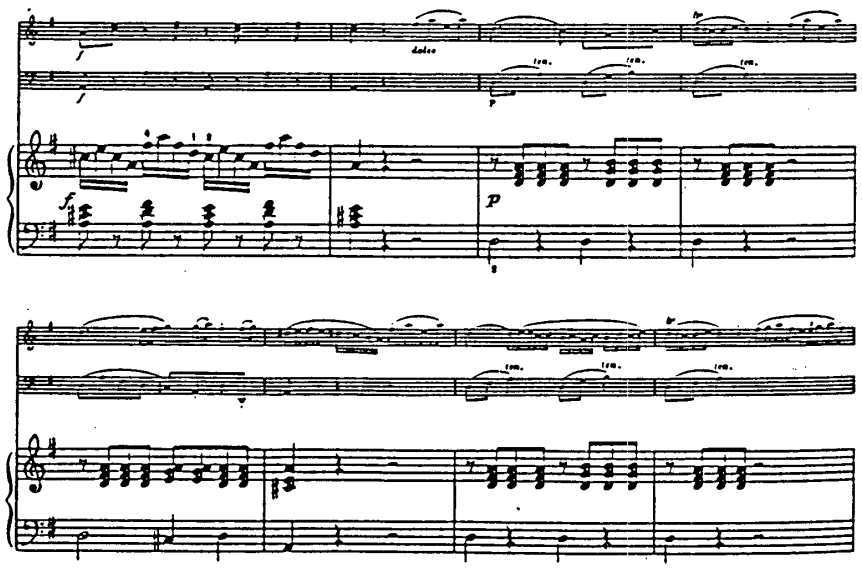
♫♫♫♫♫♫→答えの部分から成り立っている．問いの部分はよくうたい，答えの部分は軽やかに弾き分ける．

譜例1



第1主題をヴァイオリンが1オクターブ上で反復したあと，ヴァイオリンによって第2主題(譜例2)が属調の二長調で提示される．

譜例2



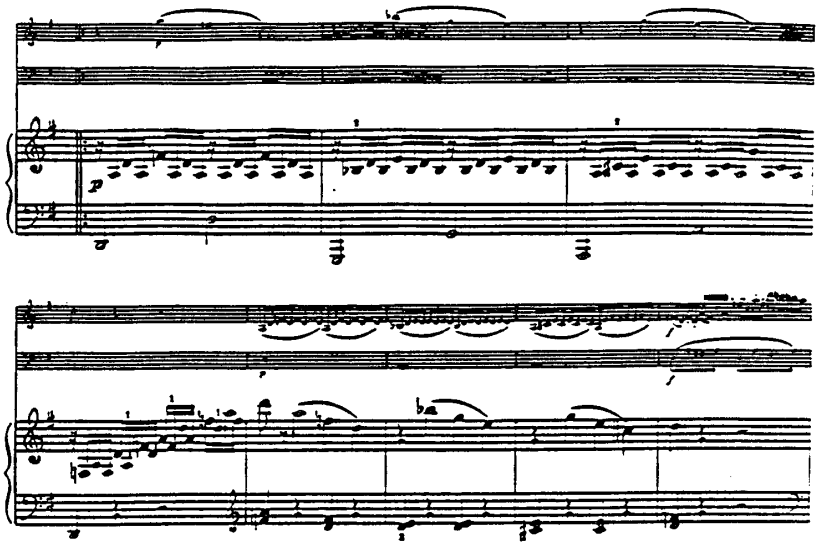
うたう要素　第1主題　♩♩♩.　第2主題　♫♫♩.♪

リズムの要素　第1主題　♫♫♫♫♫♫　第2主題　♫♫♫♫♫♫

を弾き分けることによってロココのギャラントスタイルが，はっきりあらわれる．

展開部　ピアノの左手の2分音符にのってヴァイオリンが4分音符で4小節の新しい主題(譜例3)を二短調で奏する．そのあとピアノが主題を引きつぎ，16分音符の分散和音による弦楽器とピアノのかけあいに入る．この部分は二短調―イ短調―ト長調と，2小節ずつ調性が変化し，提示部が終わる時に使われた音型がホ短調で現われる．ホ短調の属音，すなわちハ長調の導音であるhの音が2小節間弾かれたあと，ハ長調の第2主題がピアノに現われ，ひき続いてヴァイオリンに受けつがれる．16分音符の分散和音がピアノと弦楽器の間で交互に弾かれ，ハ長調―ホ短調―イ短調―二長調―ト長調―二長調へと転調する．コーダ部分のあと再現部に入る．

譜例3



再現部　第1主題はピアノで提示され，引き続いて弦楽器で現われる．第2主題は提示部と異なり，まずチェロが奏する．ピアノのリトルネルロがヴァイオリンに移されてから，提示部と同様にこの明快な楽章を閉じる．

第2楽章　Andante　ハ長調　8分の3拍子　主題と6つの変奏曲(119小節)

主題(譜例4)は1768年にモーツァルト自身が作曲したジングシュピール「バスチアンとバスチエンヌ」K. 50の第1曲　バスチエンヌのアリアである．16小節の主題はピアノで奏される．

第1変奏　主題はヴァイオリンが奏し，ピアノは16分音符で彩りをそえる．ヴァイオリンのレガートをそこなわないようにピアノもおだやかに奏する．

第2変奏　主題はチェロに移る．この楽章に限らず，この曲においてチェロの役割はあまり重要視されていない．しかし唯一主題を奏する部分であるので，チェロはたっぷりうたって弾く．この変奏でのピアノの左手の16分音符も，第1変奏と同様にチェロを彩るようにレガートで弾く．

第3変奏　再びヴァイオリンが主題を奏し，ピアノは右手の三連符と左手の8分音符で，第1・2変奏とは少し趣きが変わる．

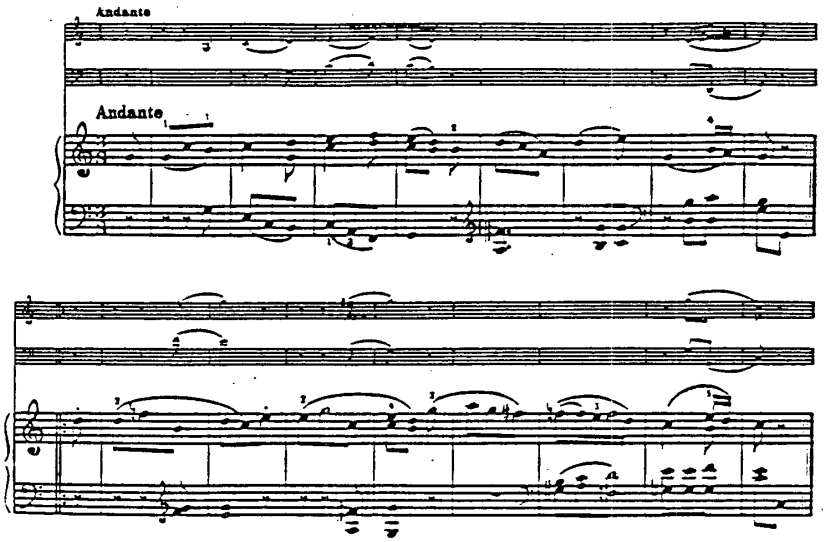
第4変奏　ピアノの右手と左手で対話がかわされる．いずれも繰り返しをするが，1度目f 2度目pというように単調にならないようにディナーミクをつける．

第5変奏　ハ短調のミノーレで，ピアノが主題の音型を短調で奏する．(譜例5)

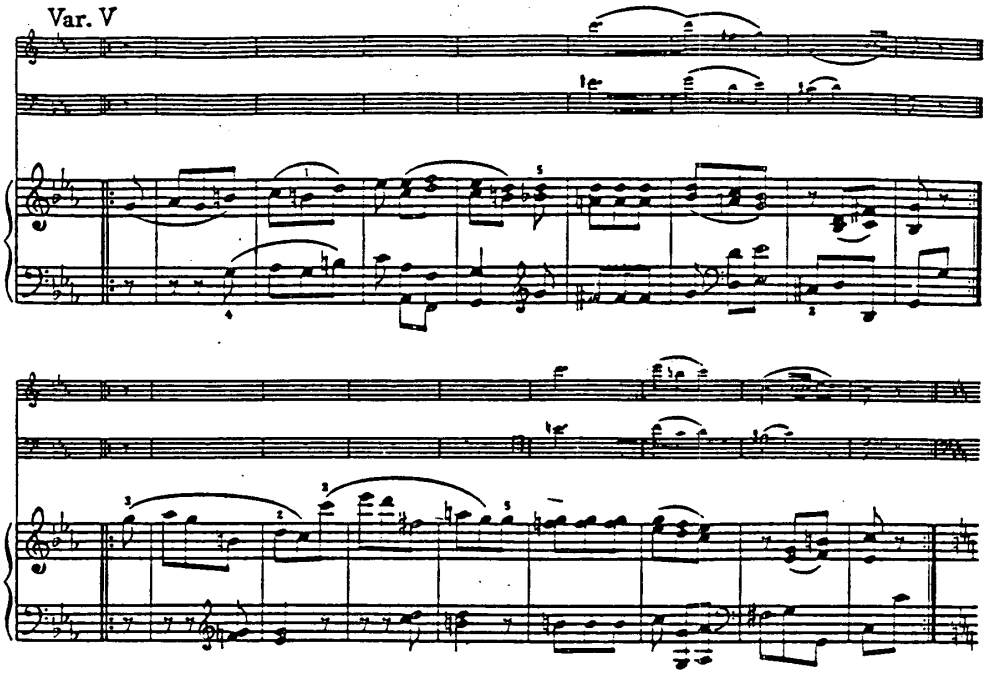
第6変奏　再びハ長調にもどり最後の変奏となる．弦楽器の16分音符の動きとピアノの32分音符の細やかな動きが，とてもきらびやかである．32分音符は，つぶのそろった音で奏しなければならない．

コーダ　第6変奏のピアノのパッセージをヴァイオリンが奏し，ピアノは主題を奏して終わる．

譜例4



譜例5



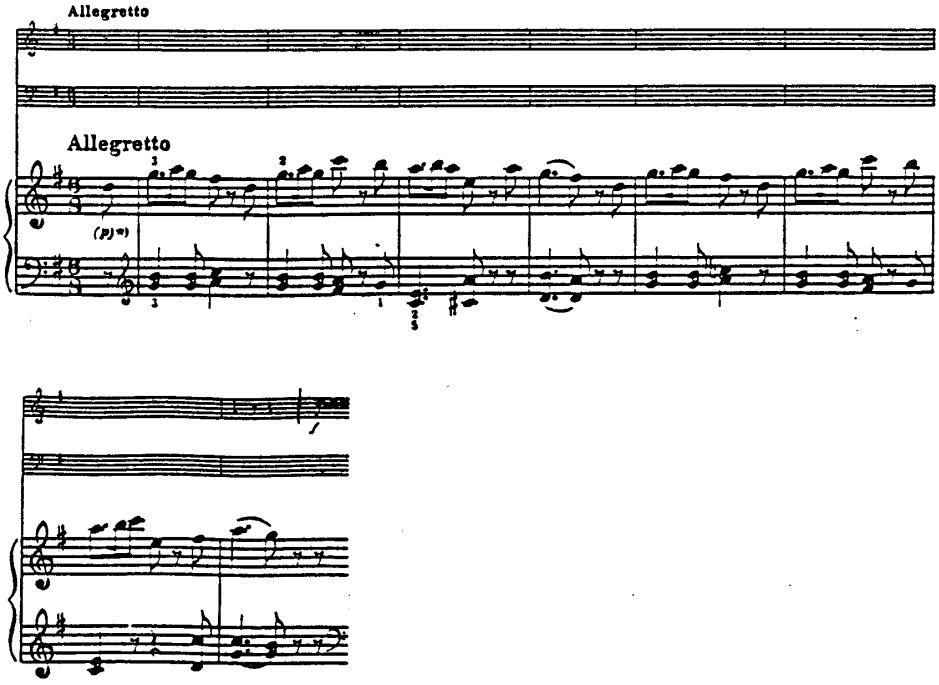
第３楽章　Allegretto　ト長調　８分の６拍子　(159 小節)

シチリアーノのリズムをもったロンド形式 (A－B－A－C－A)

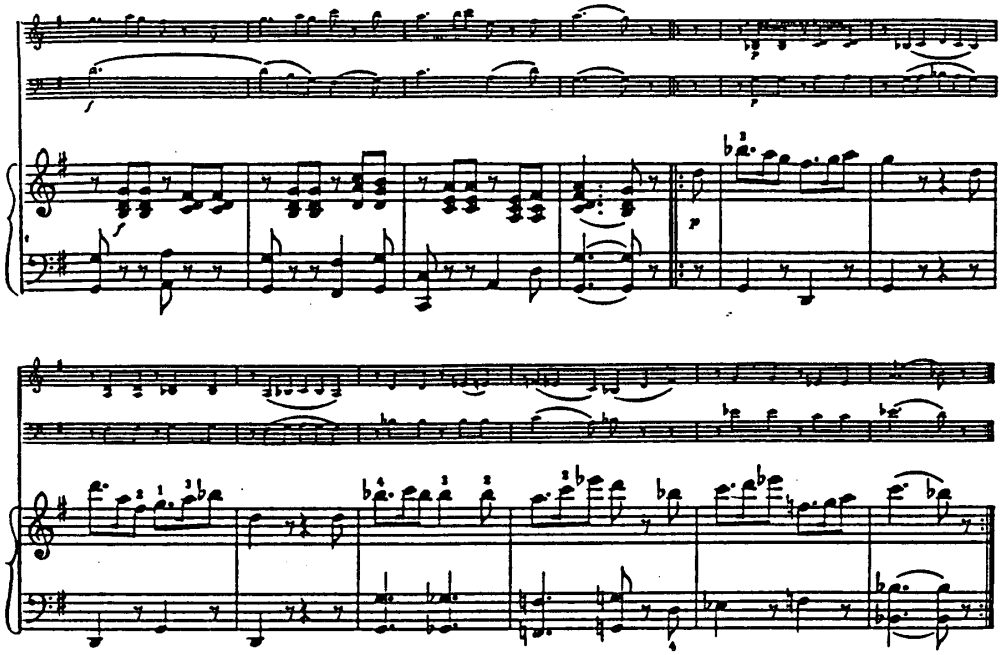
A：シチリアーノのリズムをもった主題 (譜例６) がピアノで奏され，ヴァイオリンで繰り返される．次にピアノとヴァイオリンが属調である二長調で続けられ，再びト長調にもどって終わる．

B：ト短調　ピアノが主題に由来する間奏 (譜例７) を弦楽器の伴奏で弾いたあと，ヴァイオリンに旋律が受け渡される．この部分は少しテンポをゆるめることにより，ト短調であることを印象づけたい．

譜例６



譜例７



A：再びト短調にもどり主題を再現したのち，短い移行部をはさんで，新しい間奏(譜例8)が下属調であるハ長調でピアノに現われる．

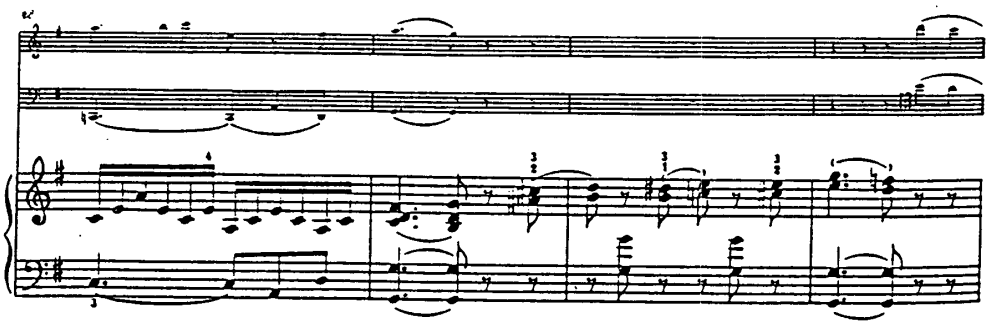
C：ピアノ・ヴァイオリンと反復される，生き生きとした部分である．(譜例9)

同じ音型が，ピアノとヴァイオリンで繰り返されるので，強弱をしっかりつけ，ピアノが伴奏になった時は，重い感じにならないように，leggieroで弾くようにした．♩♪♫♫♩の音型がヴァイオリンとチェロでかけあいのように現われたあと，短い移行部をはさんで再び主題がピアノに出る．

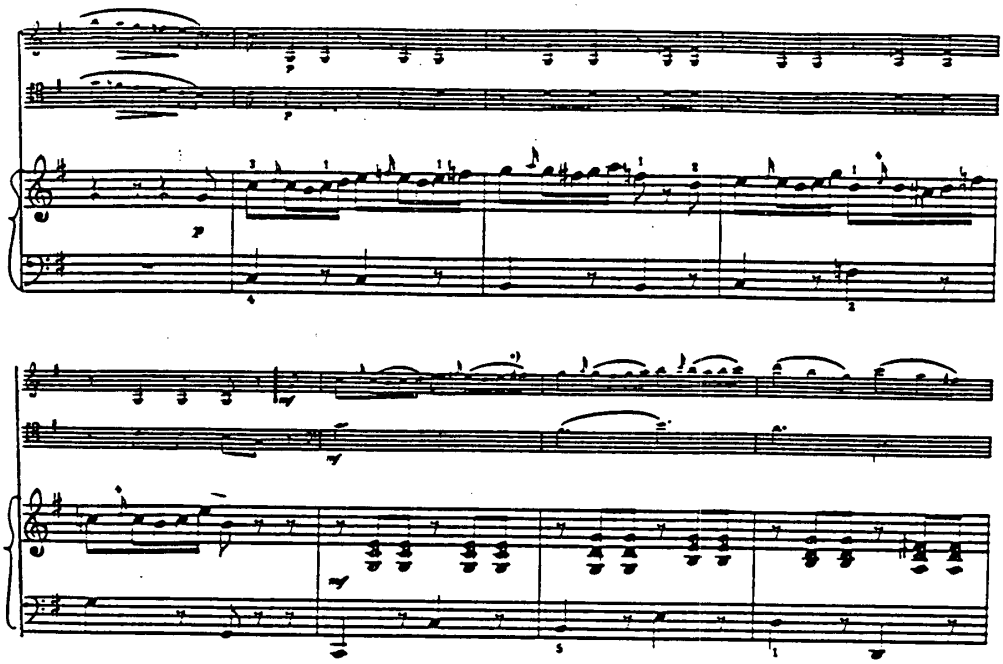
A：ト長調　ピアノが16分音符の分散和音で彩る中をヴァイオリンが主題を奏する．チェロも加わり，各パートに主題の応答・模倣が行なわれ，この楽章を終わる．

ロンド形式であるので，B・Cの部分を弾いたあと，いつもA(主題)が同じようにもとのイメージにもどるように注意した．

譜例8



譜例9



結　　語

K. 564は単純な構成をもつ作品ではあるが，旋律が生き生きとして美しく，音楽的にも充実している．次回はモーツァルトのピアノ三重奏曲の最大傑作の1つといわれているK. 542ホ長

調について，楽曲分析及び演奏を行ない，K. 564 との比較研究をしたい．更に，2曲のピアノ四重奏曲 (K. 478, K. 493) とモーツァルトが「自分が生涯に書いた最上のものと考えた」ピアノと管楽器 (オーボエ・クラリネット・ホルン・ファゴット) のための五重奏曲 K. 452 をこのような形で研究し，演奏する時に役立てたい．

文　　献

1) 標準音楽辞典　1971　音楽之友社
2) 属　啓成　1975　モーツァルトIII器楽篇　音楽之友社
3) 門馬直美　他　1976　名曲解説全集 8 室内楽曲　音楽之友社
4) 海老沢　敏　1984　モーツァルトの生涯　白水社
5) 海老沢　敏　1988　新モーツァルト考　日本放送出版協会
6) D. J. グラウト　服部幸三・戸口幸策共訳　1971　西洋音楽史上・下　音楽之友社
7) S. サディー　小林利之訳　1981　モーツァルトの世界　東京創元社
8) A. アインシュタイン　浅井真男訳　1966　モーツァルトその人間と作品　白水社
9) D. W. ジョーンズ他　奥田恵二訳　1985　クラシック音楽史大系 3　パンコンサーツ